特別
へ13
4447
2

谷藤

413
4447
2

おのみ
まうて　いせものがたり下の巻

浜　信濃拔之我迹

○如此て三人の男ども　やど　ぬぶのさま　みぬ口の宿を
わたりて　ゆけば　小篠ふきて　ねも　かぼそ　ものすごき
所　みち　ものすごし　板ぶきの　のびをなるに　ふく
時　ものすごき　所　つも　ものすごく　ふく　人も　稀
なれば　さびしく　雨　来　たれば　たてば
ものぐるほしく　思ふ　かたちの　松

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て、そこなどのそこつなる事の様ども

諸国距程

一京より　九十里
一堺より　一里半
一津より　七里
一伊賀より　拾七里半
一加賀より　九里半

編者曰、此程記、あるべき事なれども、

とにかくこの男、そこなどをあて、きくと事なる
かなと云て、さの安よ慰しぬ、さるまねしと思和
葉傳のひとり解しなど、笑てくく旭

の知たちを面白て、御ぎまらふとのたまふ
知がるまるよの諸のそのものの知はよ
はきまるとうくひして、京の知人をたずまま
ひとも解まつて、京をとこそ御のふう
きたちをふで、古のつくて京のもあんぬ法も
ともまんといふ、かくまるの人きまて
まと人まるまといひとも、京男、京イ
初のふ人まるまてだかくまり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひらきて　ゆきて　佐国　ゆきて　千柳　その
ちづま　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ていこう　陽　ゆきて　和歌　国　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　の
あるじ　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて

ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて
ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて　ゆきて

偶者新織
白猪島
頻聽古風
馬士歌

右
伊勢道中作

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建てこの屋よりいとひぬ。三間ばかりの小さき家
をまづ作りて、その中に板敷きて、畳
敷かんとすれども、砂のかの芝生の
ごとくなれば、畳をもすべ敷きて、
その上にかの砂を
置きてのち、
西の方にて、砂をかの砂
すべのうちにおのおの置きたるが
下ノ九

ごとくにひきならしたる。あるほどの家
いとあぬ。四部の中に、一体の仏像、
ほとけ
ほとけ
ほとけ

いと解けるを見て、百ばかりなる翁、をきなの
あるかたちなる、枕のあるつらをとりて、四
とせやどりをつくる、侍ぐらを、物陰の
あるひをつくりて、やはらかなる物をいだき
ゆるあるやうにて、三四人をくいて、起
きゐて、目をさまつるに、枕おぼえず、
かたちいとちごをいだきたる、
そばにあり。起ゐて、物鼻解の和の

解けるを見て、物鼻解をば
のかたへ、ぬぎひきて、かよりの四の
上をすらふをひきあるるに、
四を目をして、命
ぬぎてみてひらく、三四人
物のさまやうに解けたる
世界陸地あるべきの
目をぬぎあるに、翁のぬぎ

ゆひたる。ぬしたちまちの事なれば。
はりうちの人は。縄を見をり。やがて三間の柱に
すがりて。縄をとせる人をまつ。
ひとりまたよりかかるは。縄をとる間
しばらくありて。柱をかしらに間
をとる人。廻りをのりて。入を堅らて
とる間をそなへたるなり。あたりの
いふひとりとやんへいたりて。あのいめかて

の上をよく投りんよ。洗ちらすやうにひらひ
なんとまとふ。ふ。ぬ。ゆ。げ
ゆらりとやどりあるの板投げてみんど
をとりあたらうでうあひぬ。ひとりをうん
傾ける芝居。ひく。縄ぬ。あやまりをうさて
ちやうどをとる
をとりの縄のうけ板のうへ
ちやうど縄かゆをを

かくて夜人々吹笛奏して明ぬれば
雇用ふる船よりいとまぬ。あふぎをとりて
吹て申刻ばかりに見たりんとしてやがて
津の船にやどりんとて乗合ひ出ざる
やうにるの人浦津の船にいとまごの家を
きりて居ける所はぐるまにて船のうち
十あまり乗つんと思ふやうに宿屋所
にいとまごのはりまの国へ行けるに

明朝を待て船かりとりて宿
をとりて来るを見て有のうち家きあのうちにて
いとまごをとりて見男ぐるふまの
ふるの国の元人をとりて浦の船にて
有うるべうをとりて友達人を悔て
をとりて人をとりて明朝はうちの
船に乗て出ふ夜男をとりんまど
ある人を「世をとり捨て出ぐほど

高の宮殿やうにいつかしき
うつくしき女房牛車にのりて
門をいでぬるに松原のうち大納の御
くるまやうにて人々乗給へり
急ぎ給へとて門をいでぬ人の車
うしろ前にて乗のれば小祠の常盤
の葉のかげのもとに出るぞあるこれ少祠
の榊に懸るかけ帯ぞ長はぎやどりて

姫君を抱奉りて御車にのせ奉りて
はしの方にて乗給へば御車はしらぬ
さまの新しき家の柱のもとに
御車の轅をかけ給へば
のぶ常なるこの柱に縋松ふるしら
つゆおもたきまでなりて
いづくにか御ひとり人家ゆきの
ふるまひてあるべきの

癡心迷入夢中
境
妖態粧成野外
象

こゝとゝ絶ゆひゝとゝ
女の童白木の箱を捧る持ちとゝ
ゝてもてゝふ更衣
ゝゝ仙ゝゝ
ゝて可物ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人とのたまひしを京ぐしなりて陸奥
陸奥守藤原実房あそんの子孫にかく
ときの時分とうやひ陸奥ひまあさ出羽
しの出羽ひのまくんなりしは国人を
なして伝をあつめ相書をもげ陸奥ぐ
き松のすぐら毒の国かたなりをよ
とてくら船ひらあの国のたちまち
至国きは伝ふくんさよきぐ御の子をめひ

きくくふ上高きぐて至国のくをくくて国のくを人
いぐくひくぐ国きぐ国きくくく海くけ
くくけくを伝松国あ国くをくくを耶
郡のをよ松やし松くくをくくをあのくを
上高きぐて国よ伝ひ陸奥ひうげををぐけ
をよ食の上ア松をくぐ一ご屋ぶの和ア
人の屋のすくとおくぐ。まひくくよくでをくる
上高きくくを伝いくくくぐくをの国ぐくく

上ノ巻
蟻
下ノ巻一

[illegible]

編者つふ 叶ての是ゝ和都ゝて
丁数ゝ書ゝ埴つゝで是ゝ
ゝゝ書ゝゝゝ刻ゝゝ伯ゝ

ゝ云 津ゝゝ 齊宮村ゝで九行程八里叶ゝ 雲伯 月出
六軒 杉原ゝ田ゝの駅ゝ

[illegible]

下ノ廿三

洛 拔之作

桂の平
ゝの是 伊勢物語 後編
一名ゝゝ桂の花

全三冊 近刻

前編 奇ゝ村を出てゝ小倉
ゝ川 ゝゝ高砂ゝゝの潤
賀ゝゝ ゝ是 ゝ是ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

平文書肆

書業堂長兵衛
博古堂九兵衛
都文閣小西衛

[illegible]